

No. 8

やまぐち自然派宣言

共存から共生へ

自然共生の思想

共生随筆

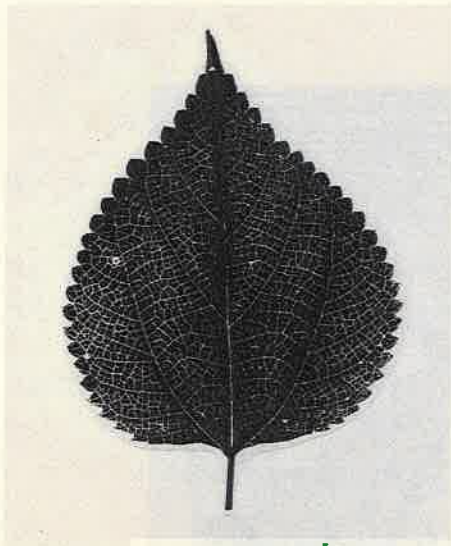
秋吉台開洞百年に思うこと

あぜみち花暦

山口県の帰化植物 帰化状況調査



共生



リレーミーティングで地域は

変わったか

山口の自然はいま

豊田県立自然公園

長門峡



やまぐち自然共生ネットワーク

平成 21 年 5 月 30 日

共存から共生へ ①

用語の変遷をめぐって

「生存と共存のための環境政策」

何十億年もかけて形成された地球生態系の中で人類は誕生した。人類の生存を維持してゆくためには、地球生態系を形づくる多くの生き物がこの地球には不可欠である。

平成三年版環境白書より

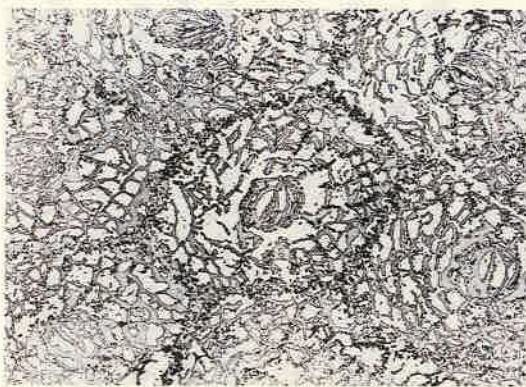


科学時代における

自然共生思想

西欧で起こった科学は、あらゆる分野に革命的な変化を起こした。物の本体を解明するには、科学は大きな力を発揮し、深い探求が進んだ。この成果は科学技術の力で私たちの生活を豊かにした。

現在、私たちの生活を見ると、衣食住を中心に自動車や飛行機等の交通、エネルギー、テレビやラジオなどの情報などあらゆる面で、科学と科学技術の恩恵に浴している。国は多額のお金をつぎ込んで、科学研究を推進、会社も生活を豊かにする商品を開発し、驚くべき科学社会を実現した。



ところが、どんなに科学社会が成熟しても、人の心の豊かさ（精神的な分野）は満足できなかった。将来に対する不安な心、肉親との死別による悲しい心、友達からのいじめによる傷心といった心の問題は科学の力ではいかんともしがたい。

元来、自然共生問題が起こったのは、人が科学技術の力を利用して自然開発を進め、環境破壊を起こしたことに起因していた。物質的な豊かさを達成した人類は、同時に環境破壊をひき起こし、公害による悲惨な病気を多発させた。それどころか、人々の心にまで、不健康な状態を引き起こした。つまり、環境が破壊されれば、人の心身ともに健康な体が維持できなくなる。環境は自然環境と社会環

境に区別できるが、自然環境は虫や草などの自然によつて維持され、その保全是、人が自然と共生することによって可能になる。

私は秋吉台で暮らしている。秋吉台を創り出した秋吉石灰岩の科学研究は大正時代から多くの科学者により進められ、大きな成果を上げてきた。石灰岩は大洋中でサンゴたちが、二酸化炭素を体に取り込み、炭酸カルシウムを成分として創り出した。石灰岩の山は、雨水で溶かされて美しい地形を作り出す。また地下には鍾乳洞ができ、神秘的な世界が生まれた。台上には残丘とドリーネが織りなす美しい風景が形づくられた。ここには石灰岩地特有の植物や動物が生まれ、見事な生態系ができた。



ところが、石灰岩が有用鉱物で、化学繊維やガラス、セメント、石灰、鉄の精錬や肥料、薬品などあらゆる分野で有用であることが解明されると、石灰産業が起こり、沢山の会社が台地をどんどん切り崩してゆく。

秋吉台の場合、秋吉台を二つに分け、東の台地は天然記念物や国定公園に指定して保全するが、西台は産業に資するため、石灰産業の利用を許すといったことが早くから決められてきたらしい。しかし、境界面では、自然の保全派と工場側では意見の相違がある。



日本人は、古くから「石」に大きな力を認めてきた。人々は石と対峙し、対話を続けてきた。多くの神社のご神体は石だった。

「石はもの言う、直に心にも言う。」

堀口大学の詩は多くの人々の共感を得た。

また、人々は石に「いのち」を見つけ出し、そこに最高の美を認めた。芸術家は石に「崇高な」美を発見し、その表現に取り組んだ。多くの芸術家は生涯をかけてその表現を深めてゆく。

私は、以前テレビで忘れられないシーンを見た。老人ホームの老女が、石にハッセルブラッド（ドイツ製の優れたカメラ）を向けて、真剣に撮影していた。生涯最後のテーマが石で、暇さえあれば石の写真を撮り続けていた。

私たちも、石灰岩の「いのち」の輝きを探りながら、もう十五年も石の撮影を続けている。石と格闘しながら、石に秘められた歴史を探り、石に対する愛情を深めてきた。

人々は自然文学や自然哲学、自然芸術、自然民俗学、自然宗教学などをおして石や大地と取り組み、格闘しながら自然に深い愛情を育んできた。

草原を流れる風が頬をくすぐる心地よさを歌い、ウグイスとの声のやり取りに野鳥との交感を感じ、ヒバリのさえずりに果てしない歓喜の心を知った。これこそ、私たちの心の健康に欠かせない栄養だった。





最近、子供たちの調査から、自然体験が大変貧弱になってきたことが報告されている。子供は自然の中でとことん遊び、学ぶことが大切だ。

また、大人も自然を科学的に探求し、自然と人との交感を論じ、自然を描きながら自然真実を考え続けることが大事だ。こうした自然から、私たちは自然共生を身につけてきた。自然の中に飛び込んで、しっかり自然と遊び、自然の神髄を探ってゆきたい。

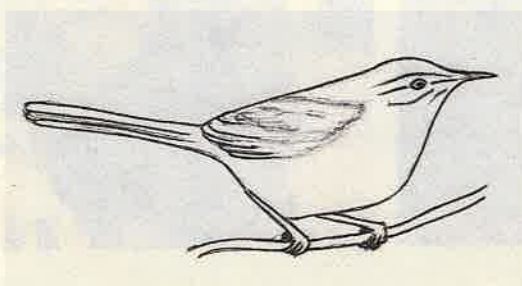
(庫本 正)

ウグイス

ウグイスという鳥はとても好奇心の強い野鳥だ。秋吉台の妙見原にあるエノキの木陰で、私たち六名が休んでいた。歩道の修復作業で汗を流し、コーヒープレイクで、コーヒーを点てていた。

皆が世間話に夢中になっていた時、突然木の上からウグイスの「ホーホケキョ」という声が響いてきた。そのあまりの美しい声に驚いて、誰かが「ホーホケキョ」とウグイスの鳴き声を真似た。

驚いたことに、ウグイスは私たちの声に反応して、すぐ「ホーホケキョ」と返してきた。こうしてお互いの「ホーホケキョ」の掛け合いが始まった。ウグイスと対話は結構心が弾んだ。

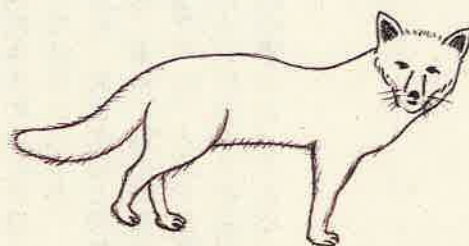


以前「山焼き」の話し合いをしていた時、赤郷の老人たちが面白い話をしてくれた。

地区の人々が一緒に山焼きに出掛けた。世間話をしながら歩いていくうちに、気がつくとキツネが人の群れに紛れ込んで、一緒に歩いていた。

この老人はキツネと人の日常的なできごとに笑いながら「キツネの奴、気をつげんと弁当を盗るからなあ。」

月明かりの中で、音もなく走り去るキツネのイメージとは全く別世界が語られていた。それにしても、昔、人々は野生動物とうまく共存していたのである。



キツネ

共生随筆

秋芳洞開洞百年に思うこと

秋吉台パークボランティアの会

木島忠興

人の活動が地球の気候まで変えてしまった結果、海水面の上昇が起こっているという。

大正時代まで瀧穴（秋芳洞の旧称）からの水は豊かで、多量の清水が流れ出ていた。私はこの水をつかって、六畝余りの水田で飯米を栽培している。しかし、今では乾期になると、水路を流れる水が減り、川下からポンプを使って水路に水を揚げるが増えた。

昭和五年ごろ、陸軍が演習のために台上への道を切り開いて以来、道は次々に広げられ、側溝もコンクリートに変わり、路面は舗装されてしまった。そのために、秋吉台の道路が傘の役割を果たし、台上に降った雨が水滴になり、水が秋芳洞に浸透してこなくなったのではないか。カルスト台地の雨水は川とならず地下に浸透し、石灰岩を溶かし、地下の空洞に洞窟生成物を形成する。また、エレベーターや黒谷支洞開設でも洞内の乾燥化が進んだと指摘されている。



先日、久しぶりに入洞した。子供のころとは違って鍾乳石が以前のようになつややかさが無くなり、足下も乾いているように感じた。大げさに表現すれば、秋芳洞が大きな石の蓋をしたような、単なる溪谷になったと言える。

照明は洞窟観光には欠かせないものである。枯竹をたいまつにして使った初期に比べ、現在の照明は洞内の生物へ及ぼす影響ははるかに大きくなり、葉緑素を持つ植物も生育するようになった。逆に、これまで洞内に生息していた生物の中には、絶滅したものもいることであろう。観光客の増加は地元経済にとって好ましいことであるが、騒音、湿度、気温、二酸化炭素など、洞内本来の姿とは違ったものになりつつあるのではなからうか。

あたかも今年は開洞百年、洞窟生物と共生を図り、子孫のためにも、末永く魅力的な洞窟観光の地として生きるために、人為を抑制し、今さえよければという「今主義」を克服しなければならぬ。近頃思うことである。

あぜみち花暦

美祢市於福岡上西寺4176番地

増原啓一

J A職員の時、ホームページの開設を提言して制作担当者になりました。様々な農業関係のコンテンツの中に、息抜きとしての役割をもつコーナーをつくることにしました。地域に密着したもので興味をひくものって？、何だろう？。結果、農家の皆さんのフィールドである田んぼや畑、土手や畦、そして道端といった農業に身近な場所で「地域限定の草花」を紹介するコーナーをつくることにしました。ちよつと長いキャッチコピーは「田や畑のあぜは人がつくった自然環境です。農業の合間、あぜにどつかと腰をおろして一休みする間、地域の自然をかんさつしてみませんか」とし、タイトルは「あぜみち花暦」としました。長い間自然に親しんできたものの、対象は動物関係が大きく、植物は一部の木本についてのささやかな知識がある程度でした。野の花に関する図鑑はたくさん市販されています。数種類の写真図鑑をそろえて準備は万端です。さて、自宅付近から観察を始めたものの、千数百種も掲載された図鑑の該当ページが見つからない。1年目、2年目は先

輩の知識を拝借しながらコンテンツを増やしていき、3年間で261種の身近な植物をアップロードしました。

どつかと腰をすえて観察を続けてみると、季節を追って変化する身近な草花の様子が見えてきました。耕作中の圃場では在来種が中

心ですが、農道や休耕地では外来種が多く見られます。地域内の田んぼのほとんどは、昭和五十年代からの圃場整備によって土地が攪拌されました。けれども山間地には、わずかながら昔からの棚田が残っています。高く広い土手には、センボンヤリ、ミツバツチグ

あぜみち花暦 4月

小さい画像をクリックすると別ウィンドウで説明を開きます



4月
下旬

file:///C:/Documents and Settings/Administrator/Desktop/あぜみち花暦/hasakym-2005/4-gaku/4-shita/matsubara.htm

(注：ホームページの
改変により「あぜみち
花暦」は現在では閲覧
することはできません
)

リ、ショウジョウバカ
マ、ウメバチソウが、
湿地の休耕地ではサワ
オグルマなどが観察さ
れます。人の営みが造
り、守ってきた環境に
生きる植物たち。身近
な場所の観察だけで
も、長い間の、人と自
然の共生の一端をかい
ま見ることができまし
た。

山口県の帰化植物帰化状況調査

山口自然と緑の会 眞崎 久

山口県には多くの帰化植物が知られていますが、古くから知られているものもあれば(例えば、「山口県植物誌」によると一九〇一年、山口市で採取されたブタクサの標本があります。)、最近リストに加えられたもの(例えば、山口県植物研究会会報三(九)に報告された二〇〇八年防府市で採取されたナヨクサフジ)もあります。私は、山口県内いろいろな場所を歩き(住所の関係上東部が多いのですが)、植物の記録を録っています。未だ知見は断片的で充分ではありませんが、帰化状況について感じたことを書いてみました。

山口県の植物相を纏めたものは、一九七二年の山口県植物誌、二〇〇〇年の山口県高等植物目録があります。両者の間の三〇年足らずの間に、帰化植物は三〇〇種余りが新たに



ナヨクサフジ

記録を増やし、種数が二・五倍になったことが、目録の「あとがき」に言及されています。帰化タンポポのように、在来タンポポが草地に多いのに対して、開発された裸地に多いことから、環境指標として調査されているものがあります。しかし、ほとんどの帰化植物は、調査が全県的に行われることがないのが実情です。綺麗な花を咲かせるオオキンケイギクは、外来生物法で規制がかかっている植物です。局地的には駆除されたと聞いたことがあります。この法



オオキンケイギク

律には駆除のことは書いてありませんが、対象種を「海外起源の外来生物であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるもの」と定義している以上、栽培などの禁止だけで、駆除しないのは片手落ちのように思えます。この法の対象種には、他にアブラ・クリスタータ、オオフサモ、アレチウリ、オオハンゴンソウ、オオカワヂシャなどがあります。あたりまえのことですが、共生とは我々の



ナガミヒナゲシ



ヒメオドリコソウ

望む環境で他の生物の共存を許していることでしかありません。しかし、我々が望んだ環境（手を加えなくなった環境も含みますが）は、私たちに害のない生物の減少・絶滅をもたらし、「生物多様性」の低下を招いています。まず実態を知ることがとても大切だと感じ、現状を調査し報告することを微力ながら行っていきたいと考えています。

この春は県央南部と東部を歩きました。可愛い花のヒメオドリコソウやフラサバソウは山間の人里にも侵入しています。ナガミヒナ



イヌコモチナデシコ

ゲシもごく普通に見られました。オッタチカタバミも報告以来あまり経過していませんが広がっているように感じました。目立ちませんがツボミオオバコやヌカススキも道端や荒地の常連となりました。イヌコモチナデシコは急速に分布拡大しているようです。

もっと気になるのがアツミゲシです。栽培禁止植物ですが、時々見る植物になっていることです。花が目立つのでここにも、ここにも。前から知られていた植物ですが、広く見つかることに驚いています。保健所への通報をお願いします。

植物の調査、記録の整理、発表原稿の作成と骨の折れる作業ではありますが、今後の環境とか自然を考える際に役に立てるものになるようにいろいろな面で工夫したいと思っています。



アツミゲシ

文献

岡国夫ほか（一九七二）山口県植物誌。
岡国夫・勝本謙・見明長門・三宅貞敏・真崎博（二〇〇〇）山口県産高等植物目録。
真崎博（二〇〇八）山口県産高等植物についての新知見（二四六）ナヨクサフジ。山口県植物研究会会報3（9）：一四—一六。

リレーミーティングで

地域が変わったか

(一) 秋吉台

平成二十一年度の最初の理事会で、「やまぐち自然共生ネットワーク」が生まれ、五年が過ぎたが、時には、その成果を検証すべきではないかという意見が出された。考えてみると、総会や理事会では、活発な意見が交わされてきたが、会自体が社会に定着し、「自然共生」社会の構築に著実に貢献しているかどうか、検討する必要があるだろう。「成長なきものは滅びる」の言葉通り、絶えず成長しない会は、その将来はあやしいと見るのもまんだら間違っていないだろう。



秋吉台でのリレーミーティング

秋吉台でのリレーミーティングは、平成十七年十月二十九、三十日に行われた。大会は秋吉台国定公園指定五十周年記念を兼ねて、盛大に行われた。会場は主会場に秋吉台家族旅行村、副会場に秋吉台科学博物館、秋吉台家族旅行村だった。



大会の目的は、秋吉台の自然体験を通じて自然を楽しみながら自然共生の神髄を理解することであった。

大会の行事内容は次のとおりであった。
一、野外活動 洞窟やカルスト台地など二日

にわたり十コースが実施された。

- 二、研究会 山口県環境教育学会、秋芳・美東・美祢の地方文化研究会合同発表会
- 三、写真コンテスト展（全国公募）
- 四、絵手紙展 秋吉台の自然に対する想い
- 五、秋吉台のビデオ観賞会
- 六、自然保護ポスター展
- 七、参加者による交流会、討論会「秋吉台で自然を考えよう」
- 八、記念講演会 元環境省の瀬田信哉先生
- 九、郷土料理による昼食会

秋吉台ならではの多様な自然体験を積むとともに、たくさんの方々の絵手紙や写真表現、秋吉台研究発表会、参加者による意見交換会を実施した。大変内容豊富な大会で、活力あるリレーミーティングになった。



事業はすべて地元のボランティアの手で行われた。参加したボランティア団体は、秋吉台エコクラブ、秋吉台の自然に親しむ会、秋吉台パークボランティアの会、ウバーレフォットクラブ、秋芳町自然保護協会などだった。地域のボランティアの会が結集できれば、大きな力を生み出すことが実証できた。



自然修復に関心を

あれから五年を経た現在、秋吉台はどのように変わったか見てみたい。第一の注目点は秋吉台の壊れた場所の修復に懸命に取り組んでいることだ。観光地では、自然を見ていただく利用法が中心になる。ところが利用すれば必ず自然は影響を受け、ひどいところでは

壊れることになる。だから常に見回りを続け、壊れかけずた場所があれば軽症のうちに修復する必要がある。このような事業に関心を持つ人が少しずつ増えてきた。これまでは、この難しい修復事業は秋吉台パークボランティアの会が先頭に立って実施してきたが、他のグループも関心を持ち始めている。たくさんの人々が正しく自然の修復をするようになればいいと祈っている。

自然は可能な限り自然状態を維持すべきだ。人は自然の文明化をしたがるが、本当の自然を維持しなければ、心を打つ美しさも、癒される自然にもならない。壊れたところは自然の復元力を生かして修復すべきだ。我々は適切な手を差し伸べて、自然の回復力を助けるだけだ。



エコツアーの開始

もうひとつ変わったことは、秋吉台地域エコツーリズム協会ができ、エコツアーが活発に実施されていることだろう。

リレミーティングに参加し、野外活動を行ったグループが中心になって、エコツアーを進めている。

エコツアーはインタープリターの方で、面白くも、つまらなくもなる。秋吉台を徹底的に探求した人や自然探求に熱中している人々の熱い思いが高い評判を生み出す。



エコツアーの目標は一年を通して日曜ごとにエコツアーが実施されることだ。現在では真冬を除くと、ほとんど目標は達成されている。参加者も年々増加している。



エコツアーを進めてゆくと、自然体験したことを語り合い、話し合いで内容を深めるようにする。説明してしまおうと、考える余地をなくして内容が深まらない。事実の説明よりも、体験した自然との交感を語り合い、考え合いたい。

参加者全員で共に考え、多様な角度、たとえば自然科学や自然と交感する自然文学、自然哲学、自然芸術・・・などを通して深めたい。こうすることにより、私たちが取り上げている自然に深い愛情が生まれ、自然共

生や自然保全の思想が確実に身についてゆく。生きたエコツアーができる。

ここで、秋吉台における最高のエコツアーを目指した探求が始まり、果てしない発展が約束される。私たちは他地域でのエコツアーの真似より、自分たちにとつて最も優れたエコツアーを探るべきだと思っている。つまり、秋吉台という台地に最もふさわしいエコツアーを私たちの手で創出することに誇りを持ちたい。これだと、大変苦勞し、時間もかかるだろうが、創造の楽しみが大きく、大きな力ができる。私たち自身が創造に生きがいを見つけることができるからだ。これがエコツアーの成長に大きな力になる。

エコツアーの楽しみは昼食だ。秋吉台の旬の食材を探し、郷土の伝統料理を楽しみたい。もちろん秋吉台の郷土料理の達人を中心にグループを結成、昼食を作る。

また、コーヒーやお茶の達人が集まれば、最高の景観地でコーヒーブレイクを楽しむことができる。実際に好評だ。

記念写真も大事だ。秋吉台の大地に参加者全員が配置され、ランドアートになる記念写真を撮る。いつも工夫して楽しい記念品を作り出せば最高だ。

エコツアーを記念に残すアルバムもつくりたい。観察した草や虫のスケッチに記念の俳

句を配して感想を書き込む。人生最高のエコツアーの記録だ。

こういった活動は洗練されると、お土産にまで高まることになる。日常的な努力がやがて地域振興の力になるだろう。

このように、エコツアーは大きく進化を続けていくべきだ。



人材と挑戦が大切

とはいっても、リレーミーティングが開かれたから地域に変化が起こったのではない。優れた人々がおられ、力を合わせて挑戦をする下地が生まれたから展開したのだ。たくさんの人々の結集と努力で、新しい文化が育ってゆくのだ。この力が年々増幅してゆくと、進歩は続く。

(末永豊明・在津国昭・庫本 正)

山口の自然は今

豊田県立自然公園

豊田県立自然公園は、狗留孫山、畢山、石柱溪、木屋川をせき止めた豊田湖からなる。豊田湖の周辺には美しい自然がよく保存されており、みごとだ。この県立公園の中核施設は豊田湖畔公園（豊田湖国民休養地）である。ここには、ビクターセンターがあり、オートキャンプ場、ケビン、野外ステージ、さえずり橋、せせらぎ川、体験農園、冒険の城、ボート桟橋、炭焼き小屋、バーベキューハウスなどを備えた大きな施設である。施設は新しく、清潔感があった。



豊田湖の水と周囲の山々を彩る緑、そしてこの自然の主人公の草や虫、鳥、魚が生きいきとしていて、自然は素晴らしい。ちょうど新緑の頃に尋ねたが、ウグイスの鳴き声は森とこだまして心地いい。

ビクターセンターを訪ねると、野鳥を観察するコーナーがあった。しかし、この自然を詳細に紹介したり、豊田湖の自然を楽しむための案内書が少なく、訪問者はどのように自然を楽しむのか、苦労するような気がした。親切なガイドブックが必要と思った。



私たちが望むのはこんな大規模な施設ではなく、自然を楽しむ湖畔のトレイル「自然観察路」と有能なインタープリターではないだろうか。四季折々の自然の素晴らしさを共に感じ、自然に癒され、自然共生の思想を学ぶ場だ。ここでは、子供たちのための都市公園のような遊び場より、素晴らしい自然と戯れ、自然発見や自然学習の出来る施設がほしい。そして、優れた指導者を置き、来訪者の要望にこたえられる指導力が大事だと思った。

また、ここから狗留孫山や畢山、石柱溪など周辺の山々への探訪ルートの解説コーナーも必要と思った。

この立派な施設を正しく活かす道を皆さんも考えてみたらいいと思った。

長門 峽

(国名勝・長門峽県立自然公園)

五月初旬、久しぶりに長門峽に行った。国道九号線を山口市から徳佐方面へ向かい、その途中に長門峽道の駅がある。ここに駐車し、長門峽の探勝コースを歩いた。山口線の長門峽駅からも近く、アクセスが良かったため、年間を通して訪れる人は多く、特に秋の紅葉狩りの季節は混雑する。



駐車場から出て直ぐに、大正十二年に建立された国名勝の碑がある。現在の探勝路の原形は、大正時代地質学者で、日本画家でもあった萩出身の高島北海らの尽力により建設されたものだ。入口には中原中也の「冬の長門峽」の碑もある。道はよく整備され、案内板も所要所所にあり、迷うことはない。遊歩道

沿いの谷ではタゴガエルの鳴き声が、本流の所々でカジカガエルの鳴き声が聴こえてくる。浅瀬ではアオサギが採食し、カワガラスが溪流沿いを飛んでいるのを見かけた。樹木にも所々ネームプレートが設置され、樹の名前や特性が分かるようになっている。ここから萩側の竜宮淵までは一時間四十分のコースだ。往復三時間以上かかる。



長い年月を経て浸食された断崖や巨岩、変化に富む風景、何度来ても飽きることはない。季節により様々な変化が楽しめる。これまでとは漫然と歩いていたコースを、今回は案内板の地名を確認しながら歩いてみた。千瀑洞口↓榧ヶ淵↓船入↓大谷淵↓瀬淵↓鈴ヶ茶屋↓上和留瀬↓紅葉橋↓竜宮淵、風景とマッチした名前が付けられていて、趣を感じる。特に瀬淵では。すでに絶滅してしまったカワウソ

が、魚などを捕りながら生活していた様子を想像した。



歩いていて残念なのは清流とは言えないことだ。この渓谷に流れてくる水は、農地や住宅地を通ってくる。下流には阿武川ダムあり、流れをせき止めている。勾配も緩やかで、この水の濁りや、流木やゴミなどはしょうがないのかもしれない。



お知らせ

自然共生手づくり事業募集中！

県では、環境学習推進センターと連携して、身近な自然とのふれあい活動や保全活動など、県民が主体となった取り組みを支援する。「自然共生手づくり事業」を実施しています。具体的には、自然環境の保全のために行うフィールド整備（柵・看板の設置、清掃、遊歩道の整備等）に必要な経費を20万円を上限に助成するといものです。

今年度の募集団体は8団体程度となっておりますのでぜひお申し込みください。

【問い合わせ・申込先】

環境学習推進センター

（財）山口県ひとづくり財団県民学習部

電話 083-987-1110

<http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/learning/index.php>

※申請様式等詳細は、右のホームページでご確認ください。



不法投棄防止の取組への協力依頼

県では、廃棄物の不法投棄対策として様々な取組を行っています。が、小規模な不法投棄が後を絶たないことから、やまぐち自然共生ネットワーク等の団体に協力を依頼することになりました。

日頃の活動などで不法投棄を発見したら、「不法投棄ホットライン」へ通報していただくよう協力をお願いします。

【不法投棄ホットライン（フリーダイヤル）】

0120-538-710（ゴミハナイハ）

※ホットラインは、最寄りの健康福祉センター又は下関市に接続されます。

※携帯電話、PHS、自動車電話では接続されませんので、直接健康福祉センター又は下関市廃棄物対策課にお知らせください。

センター名	電話番号
岩国	0827-29-1524
柳井	0820-22-3631
周南	0834-33-6429
防府	0835-22-3740
山口	083-934-2536
宇部	0836-31-3200
長門	0837-22-2811
萩	0838-25-2663
下関市	083-252-0978

編集後記

もうじき暑い夏がやってきます。昨年は温暖化防止に参加しようと、ヒョウタン、ゴーヤ、アサガオで緑のカーテンにチャレンジしました。それぞれ最初は順調に育っていましたが、ヒョウタンは虫がついて全滅、アサガオはまつすぐ登るだけでカーテンにならず、ゴーヤだけがなんとか目的を達成してくれました。昨年の経験を踏まえて、今年はゴーヤだけを植えてみる予定です。

会員の皆様のお宅ではどうでしょうか。

「共生」では、皆様の様々な取組や意見を掲載してネットワークの輪を拡げていきたいと思っています。

皆様の投稿をお待ちしています。

編集係 内田

